

# 遼塔・金塔における碑形装飾について

A Study of Monumental form Ornaments on the Stūpa in Liao and Jin Dynasty

水 野 さ や

MIZUNO Saya

## 1. はじめに

遼代の仏塔およびその形式を継承した金代の仏塔には、仏・菩薩・天部などの仏教尊像、竜・鳳凰・雲などの天界を象徴するモチーフ、宝珠・天蓋・蓮華などの仏菩薩を莊嚴・供養するモチーフなどを第一層塔身に配置するものも少なくない。そして、そこに表される尊像群には、いくつかの構成が認められる<sup>1</sup>。例えば、朝陽北塔（遼寧省朝陽市）、宝塔寺塔（朝陽市鳳凰山）、妙峰寺東塔（遼寧省綏中市）、興城白塔峪塔（遼寧省錦州市興城県）など、鳥獣座に坐す金剛界四仏を表すものである。また、八棱観塔（遼寧省朝陽県）においては、現状における尊像の保存状態から八尊すべての確認はできないものの、文殊菩薩、除蓋障菩薩などを含むことおよびその配置から、八大菩薩である可能性を有している。遼塔・金塔の第一層塔身における最も多い構成は、八面に仏龕を設け、その左右に菩薩像ないしは比丘像・力士像を伴い、大日如来（南面）を含む如来坐像八軀を龕内に表すものであり、中京大塔（内蒙古自治区赤峰市寧城県）をはじめ、崇興寺東・西塔（遼寧省北鎮市）、遼陽白塔（遼寧省遼陽市）、広勝寺塔（遼寧省義県）、広齊寺塔（遼寧省錦州市）、鉄嶺白塔（遼寧省鉄嶺市）、開原崇寿寺塔（鉄嶺市開原県）、康平小塔子塔（宝塔寺塔、遼寧省瀋陽市康平県）などが挙げられる。その他、北京天寧寺塔（北京市宣武区）においては、東・西・南・北の四面に門扉、その左右に金剛力士像、他の四面に格子窓と供養菩薩像などを配し、門扉拱輪部に大日如来を含む三軀の如来・三目十八臂の七俱胝仏母（准提）とみられる菩薩の

坐像を表す<sup>2</sup>。

また、特徴的なモチーフとして、観音寺白塔（天津市薊県）、興城白塔峪塔（遼寧省錦州市興城県）、興城磨石溝塔（錦州市興城県）における碑形装飾が挙げられよう。もちろん、碑形装飾を伴う遼塔・金塔の個々については、先行研究において報告されているものの、塔の機能に即し、全体を通した言及はなされていない。

そこで本論は、この碑形装飾を伴う遼・金の仏塔について、それぞれの碑形の形式と刻文・刻字を確認することからはじめ、これまで朝陽北塔などにより考察に及んできた遼塔の機能、すなわち、仏頂尊勝陀羅尼の効力を最大限に発揮するための容れものとしての機能を照らし合わせ、その役割を考察することが目的である。

## 2. 碑形装飾の形式と刻文・刻字

これまでに実地調査に及ぶことができた遼・金塔において、第一層塔身に碑形装飾を表す例は、興城白塔峪塔（図1-1～10）、興城磨石溝塔（図2-1～8）、観音寺白塔（図3-1～6）の三基であり、いずれも八角平面のプランを有する塔である。三塔に共通するのは東南・西南・西北・東北の四面に碑形装飾を表すことであるが、対して、東・西・南・北の四面には、興城磨石溝塔および観音寺白塔においては門扉、興城白塔峪塔においては仏龕内に金剛界四仏を配し、相違がある。以下、各塔の概要および碑形装飾について確認する。

### (1) 興城白塔峪塔

興城白塔峪塔（図1-1-10）<sup>3</sup>は、遼代の巖州城址とされる場所に位置し<sup>4</sup>、上・下二層の基壇の上に塔身部を載せる八角十三層密檐式磚塔で、現高43m<sup>5</sup>である。戦前より下層基壇は損傷が著しく<sup>6</sup>、完全に近年の修理に置き代わっており、八角の隅を力士が支える上層基壇、および二層目以上の塔身部屋蓋にも修理が及んでいる。

1956年に本塔附近の村より出土したとされる『覺華島海雲空通山悟寂院塔記』（現状において、著者はこの塔記を確認していない）に「大安八年歲次壬申九月辛巳朔二十九日、皇孫燕雲公主件舍利浮屠十三檐、高逾百丈」と記されるとされることから、本塔は空通山悟寂院舍利塔と称し、遼・道宗大安八年（1092）に創建され、皇孫燕雲公主の発願になることが指摘されている<sup>7</sup>。ただし、ここに記される覺華島と寺地の位置関係が曖昧なことから、この塔記が本塔に付随するものかについては、なお検討を要する。

そして、第一層塔身の上端にパルメット装飾を並べる表現は、遼・大安七年（1081）銘の碑を伴う戒台寺法均大師遺行塔（北京市門頭溝区）においても認められるが、本塔におけるパルメット形は金・大定十五年（1175）頃の潭柘寺広慧通理禪師塔（北京市門頭溝区、図4-1-3）、懿行大師塔（12世紀中頃～後半）をはじめとする銀山塔林の五基の塔（北京市昌平区）、香岩寺南・北塔（遼寧省鞍山市千山）など、多くは金代の僧塔に顕著な特徴である<sup>8</sup>。この点に留意するならば、塔の現状を大安八年（1092）に遡らせることは、なお慎重になるべきであろう。

第一層塔身は角柱の隅柱とし、そこに「浄飯王宮生処塔」、「菩提樹下成仏塔」、「鹿野苑中法輪塔」、「給孤独園名称塔」、「曲女城辺宝階塔」、「蒼闍崛山般若塔」、「菴羅衛林維摩塔」、「娑羅林中円寂塔」と刻出する。すでに別項において取り上げたが、これは『大乘本生心地観経』に依拠する八大霊塔である<sup>9</sup>。

なお、八大霊塔名は朝陽北塔、中京大塔においても認められる。ただし、方形十三層密檐式磚塔の朝陽北塔（図5-1-2）においては隅柱ではなく、東・西・南・北の四面に、各方角に対応させた金剛界


四仏を中心に配し、その左右に菩薩像と宝塔を浮彫し、各宝塔の脇に塔名が添えられる。この塔名はいわゆる位牌形を呈している。また、中京大塔（図6-1-2）においては、隅柱に八大霊塔名とともに八大菩薩の尊名を伴う点において異なる。中京大塔は八角十三層密檐式磚塔であり、東南面・南面隅柱に「浄鉢王宮生処塔」と「観世音菩薩」、南面・西南面の隅柱に「菩提樹下成仏塔」と「慈氏菩薩」、西南面・西面の隅柱に「鹿野園中法輪塔」と「虚空蔵菩薩」、西面・西北面の隅柱に「給孤独園論議塔」と「普賢菩薩」、西北面・北面の隅柱に「曲女城辺説法塔」と「金剛手菩薩」、北面・東北面の隅柱に「蒼闍崛山般若塔」と「妙吉祥菩薩」、東北面・東面の隅柱に「菴羅衛林維摩塔」と「除蓋障菩薩」、東面・東南面の隅柱に「娑羅林中円寂塔」と「地藏菩薩」を刻出する。ここでは「給孤独園論議塔」と「曲女城辺説法塔」が『大乘本生心地観経』所出の名称と異なっており、また、「菴羅衛林維摩塔」を「林衛」とするが、遼代における漢字・梵字表記にはしばしば異体字が用いられ、誤字もまま認められることから、同一のものとみなしてもよいであろう。

興城白塔峪塔第一層塔身東・西・南・北の四面には、中央に仏龕を配し、左右に菩薩立像と天蓋、その上部に仏名、鏡、左右に雲中の五化仏、さらに天蓋を掲げる。龕内の如来坐像はそれぞれ宝冠を戴き、胸飾を付け、鳥獣座に坐る。南面如来坐像は、左手は胸前に置き、右手は膝上で与願印を結び、馬座とする。龕上の仏名は「宝生如来」である。西面如来坐像は、両手ともに腹前に置いて定印を結び、孔雀座とする。龕上の仏名は「無量寿仏」である。北面如来坐像は、左手は胸と腹の間ほどの高さに置き、右手は胸やや上方に置いて施無畏印を結ぶ。現状において台座の鳥・獣を欠している（本来は金翅鳥座であろう）。龕上の仏名は「不空如来」である。東面如来坐像は、左手は胸前に置き、左手は膝上で触地印を結び、象座とする。龕上の仏名は「阿閼如来」である。このように、各仏龕内には金剛界四仏をそれぞれの方角に配置し、これら四仏の仏龕左右の菩薩立像は、蓮、弘子を執る。



第一層塔身西南・西北・東北・東の四面には、中央に碑形を配し、左右に比丘立像（西南・東南面）、菩薩立像（西北面）、天王像（東面）を表す。碑形の両脇の立像の上にそれぞれ天蓋を掲げ、その上に鏡を嵌める。碑形の上部に鏡、その上に天蓋を掲げる。左右に飛天を配し、この飛天の上にもそれぞれ鏡を嵌める。

碑座（碑趺）は蓮華とし、碑身の左右は蔓草文様で縁取られる。碑首は中央に碑額部分を設け、その周囲に二竜を配する。二竜はそれぞれ一方から他方へ向けて体軀を屈曲させ、頭部と前脚を下方に伸ばし、後脚は碑額上方に挙げ、その間に火炎発宝珠を挟む。各面の碑身の刻文と碑額部分は次の通りである。

東南面は「寂滅為樂」であり、碑額部分に如来坐像を表す円形陶板を嵌める。西南面は「諸行無常」であり、碑額部分に如来坐像を表す円形陶板を嵌める。西北面は「是生滅法」であり、碑額部分に  (om) の梵字が刻まれる。東面は「生滅滅已」であり、碑額部分には西北面同様梵字を刻むが、摩滅のため判別できない。以上のように、碑文は釈迦涅槃偈により構成される。また、後述する観音寺白塔における碑形装飾上部にも小型の如来坐像が表されており、如来坐像を表す円形陶板は、もとは梵字が刻出されていた上に嵌められた可能性と、もともと如来坐像を配した可能性のいずれか、現段階においては両者ともに留めておきたい。

なお、本塔における碑形装飾の碑額の形は、観音寺白塔の如来坐像を表す龕の形と共通するが、大覚寺の遼・戊申年銘（1068年）陽台山清水院創造藏經記（北京市海淀区、図7-1・2）、戒台寺の遼・大安七年銘（1081）法均大師遺行碑（北京市門頭溝区、図8-1・3）の螭首の竜の表現とは異なるようである。大覚寺碑、法均大師碑ともに、竜は鼻から顎までがわりあい長く延び、平板な印象を受ける。対して、本塔における螭首の竜の頭は鼻先は丸く、金・天徳四年（1152）銘の安昌峴舍利塔（葫蘆島市南票区、図9-1・4）<sup>10</sup>に通じる感がある。観音寺白塔は、遼・清寧四年（1058）銘を刻む石製の舍利函が出土したことから、この頃を創建の目安とする考え方






がある。しかし、現状における螭首の竜の表現などを鑑みると、本塔は塔記に記すごとく遼・道宗大安八年（1092）創建であったとしても、現状は、先述のバルメット形の表現もふまえ、金代のものと推測する。

なお、本塔の下12mの深さから、八角石造の地宮が発見された。その中には、八大霊塔名、涅槃偈、陀羅尼造塔功德經、九聖八明王・一百二十賢聖・五仏七仏の名号などが収められていたようである。また、八大霊塔の塔名と涅槃偈は、第一層塔身隅柱の塔名および碑形装飾の刻文と同じものと報告されている<sup>11</sup>。

## （2）興城磨石溝塔

興城磨石溝塔（図2-1・8）は、八角基壇の上に塔身部を載せる八角九層密檐式塔で、現存高17.4m<sup>12</sup>である。基壇は完全に近年の修理に置き代わっている。第一層塔身は、東・西・南・北の四面においては中央に門扉を設け、その左右に合掌する菩薩立像を、上部に天蓋を配する。他の四面においては中央に碑形を配し、その上部に飛天を表す。また、第一層塔身の隅柱は円柱形とする。

この碑形は、亀趺の上に碑身を載せ、碑身に縁取り文様などはなく梵字一字のみ刻され、碑首は中央に碑額、その周囲に二竜を配する。二竜はそれぞれ一方から他方へ向けて体軀を屈曲させ、頭部と前脚を下方に伸ばし、後脚は碑額上方に挙げ、その間に火炎発宝珠を挟む。碑額には本来何かが嵌められていたようであるが、すべて亡失している。

各面の碑身の刻字は、東南面は  (om)、西南面は  (ba) とする。また、東面は  (dī) もしくは  (bhaḥ) と思われ、また、西北面は  (ā) と推測されるが、いわゆる北方異体字と称される一般的な梵字の字体ではないため、即断は避けた。なお、omは興城白塔峪塔においても認められたが、こちらは西北面であり、配置される方角が一致しない。

亀趺は頭部が欠けているが、肉付きがよく盛り上がる前脚は、海城金塔（遼寧省錦州市海城県、図10-1・3）基壇部の獅子像を思わせるものであり、碑形装飾上部の充実した肉付きを誇る飛天は、同様

に海城金塔第一層塔身、金代の香岩寺南・北塔（遼寧省鞍山市千山）の飛天にも共通する体軀表現である。螭首の竜の表現も、安昌峴舍利塔（1151年）、金・大定二十二年（1182）銘の大金重修東岳廟之碑（山西省大同市）などとの類似性が感じられる。

### (3) 観音寺白塔

観音寺白塔（図3-1～6）は、八角基壇の上に三層の塔身を載せ、その上部にラマ塔形式の覆鉢と相輪を設ける高さ30.6m<sup>13</sup>の塔である。第一層塔身は、東・西・南・北の四面に門扉を設け、他面においては、上部に小仏龕を表す碑形を浮彫し、文字を刻出する。また、第一層塔身の隅柱は経幢形とする。

塔内の調査・修理時に天宮および地宮から納入品が出土し、その中に遼・清寧四年（1058）銘を刻む石製の舍利函が報告されている<sup>14</sup>。本塔の創建年代の目安となるものの、現状における塔の姿がこの頃とは言い切れない。ラマ塔形式の覆鉢を伴う塔は雲居寺北塔（北京市房山区）の他、銀山塔林の僧塔（図11）など、金代の僧塔にも見い出せるからである。特に後者の塔身部の隅柱が経幢形を為す点は、観音寺白塔と共通する。

各面の碑形装飾は、碑座は八角（その半裁形）とし、碑身に縁取り文様は設けず文字を刻み、碑首は左右への突起を設けて半円形に立ち上がり、その中心（碑額の位置）に浅く龕を設け仏坐像を表す。竜・鳳凰・雲などの装飾は伴わない。

各面の碑身の刻文は、東南面に「諸法因縁生、我説是因縁」、西南面に「因縁尽故滅、我作如是説」、西北面に「諸法從縁起、如來説是因」、東北面に「彼法因縁尽、是大沙門説」であり、後述のように、舍利の法頌を構成する。

## 2. 遼塔の機能からみた刻文の検討

まず、別稿において述べたように、朝陽北塔、中京大塔および興城白塔塔塔は、『大乘本生心地観経』に依拠する八大霊塔名を伴う塔である。また、銘文を記さないが宝塔モチーフを塔身部に表す塔は

多く、それは弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼経』に「当持呪本置於塔中而興供養此塔。或作小泥塔満足七十七。各以一本置於塔中而興供養如法作已。命欲尽者而更延寿。一切宿障諸惡趣業悉皆滅尽」<sup>16</sup>と説かれるように、多くの小塔の造立により延寿と一切の宿障諸惡趣業の皆滅を獲得することを期待したためと考えられる。ここに『大乘本生心地観経』の八大霊塔に帰依することで獲得できる効力<sup>17</sup>が加わり、「尊勝陀羅尼の効力＝塔の効力＝（諸々の塔の代表的存在としての）八大霊塔の存在」という関係性が成立する。八大霊塔を建立する目的は本経においても、また宋代の法賢訳『八大霊塔名号経』においても、「發大信心修建塔廟承事供養。是人得大利益。獲大果報具大称讃」のように八大霊塔を供養すれば増益し果報を得られ、また、「此八大霊塔。向此生中至誠供養。是人命終速生天界」<sup>18</sup>のように霊塔供養により天界への往生を保証するなど、明確である。

このように、遼塔に付される名号は、具体的な効果を保証する経軌から引用される傾向が強く、塔の立地も『仏頂尊勝陀羅尼経』に説く、陀羅尼の効力を発揮するのに適した場所、すなわち、「若人能書写此陀羅尼。安高幢上。或安高山或安楼上。乃至安置窣堵波中（中略）諸供具華鬘塗香末香幢幡蓋等衣服瓔珞。作諸莊嚴於四衢道造窣堵波。安置陀羅尼」<sup>19</sup>が想定されていた。

ここで、塔身における碑形装飾ではないものの、雲居寺北塔基壇部の「法舍利塔」（図12）も参考とし、観音寺白塔の碑文を考えてみたい。この「法舍利塔」には、「諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、我作如是説」と陽刻される<sup>15</sup>。そのため、観音寺白塔における東南面の「諸法因縁生、我説是因縁」と西南面の「因縁尽故滅、我作如是説」および雲居寺北塔の「法舍利塔」銘文については、ここでは『造塔功德経』との関係を強調しておきたい。唐の地婆訶羅訳『造塔功德経』は、塔を建立することで得られる具体的な功德を説く。「爾時世尊説是偈言、諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、我作如是説。善男子。如是偈義名仏法身。汝当書写置彼塔内」<sup>20</sup>とあるように、世尊は「諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、

我作如是説」の偈を書写し建立した塔内に安置することを述べている。また、西北面の「諸法從縁起、如來說是因」、東北面の「彼法因縁尽、是大沙門説」については、唐の義浄訳『浴仏功德經』に認められる。「我涅槃後。若欲供養此三身者。當供養舍利。然有二種。一者身骨舍利二者法頌舍利。即説頌曰、諸法從縁起、如來說是因、彼法因縁尽、是大沙門説。若男子女人苾芻五衆應造仏像。若無力者下至大如麴麥。造窠觀波形如棗許。刹竿如針。蓋如麴片。舍利如芥子。或写法頌安置其中。如上珍奇而為供養」<sup>21</sup>とあり、「諸法從縁起、如來說是因、彼法因縁尽、是大沙門説」の法頌を書写して塔内に安置することが説かれている。

また、隅柱ないし第一層塔身の各面に宝塔モチーフを表す目的は、先の述べたとおり、多くの小塔の造立により得られる功德を期待してのものであろう。以上の法頌は直接的には「八大霊塔」ではないものの、その目的に共通性は認められると思われる。

次に、興城白塔峪塔の「諸行無常」「是生滅法」「生滅滅已」「寂滅為楽」について、本塔を初めて本格的に取り上げた園田一亀は「雄健なる正書を以て釈尊涅槃に入るの語、即ち諸行無常・是生滅法・生滅無量・寂滅為楽の大文字を陰刻して居る」<sup>22</sup>とする。本塔は「生滅無量」ではなく「生滅滅已」となっているが、釈迦入滅の説偈「諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅為楽」<sup>23</sup>を説く教軌・經論は、『別訳雜阿含經』、『雜寶藏經』、『根本説一切有部毘奈耶雜事』、『涅槃經本有今無偈論』など、列挙にいとまがない。

涅槃の釈迦像をあらわす舍利容器は、朝陽北塔天宮出土の重熙十二年（1043）木胎銀棺（朝陽北塔博物館蔵）、北京市朝陽門内大街出土の乾統六年（1106）石造舍利函（北京首都博物館蔵）などがあり、北京首都博物館蔵および赤峰市博物館蔵など、釈迦涅槃像も多く出土している。仏塔は仏舍利納入が根本的な目的だとすれば、涅槃の説偈を伴うことに不自然さはない。しかし、ここで着目したいのは、『造塔功德經』とともに納入され、八大霊塔名とともに第一層塔身に配されていることである。

『造塔功德經』と『大乘本生心地觀經』に説く八大霊塔とのつながりについては先に触れた。いずれも具体的な効果を保証する經典であり、そこから引用されているということから、極めて実践的な側面を重視していることがうかがえた。ここでさらに、涅槃により得られる舍利を介し、「塔＝墓」、「塔＝摩尼宝珠」<sup>24</sup>、「摩尼宝珠＝尊勝陀羅尼」<sup>25</sup>のつながりについて、今一度確認しておきたい。

第一に、遼代の東塔山塔（遼寧省阜新市）など、塔内に玄室が設けられる塔がある。これは、靈巖寺慧宗塔（山東省済南市、唐・8世紀後半）、渤海の貞孝公主墓（793年）など、地上に塔を建て、その地下に墓を設ける塔墓葬の流れを汲むものである。渤海のみならず、高麗の浮屠においても石棺や遺骨がともに出土する例があり、唐代華北における高僧の葬送形式を継承しているといえる。第二に、興城白塔峪塔における第一層塔身の各仏名は文字そのものが嵌め込まれていたが、開城崇寿寺塔（図13）および康平小塔子塔（宝塔寺塔、図14-1・2）においては仏龕上部に扁額を表し、そこに仏名を刻出する。これはむしろ、潭柘寺広慧通理禪師塔（図4-2）など、同時代の僧塔と共通する手法である。第三に、別稿において取り上げたとおり、墳墓形式の変化と塔の多角形平面プランとがパラレルな関係にあることである<sup>26</sup>。第四に、朝陽地区の遼代墓より出土した石函（朝陽市博物館蔵、図15-1・2）の蓋石上面中央に刻出された蓮台と、中央の如来および周囲の八菩薩を表す計九つの種字から、不空訳『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』（8世紀後半）との関わりがうかがえることである<sup>27</sup>。同様に八大菩薩を第一層塔身に配するとみられる八棱観塔、八大菩薩の尊名を表す中京大塔もあり、尊勝陀羅尼の功德を介し、墓と塔に付随するモチーフが共通することとなる。

これらのことから、舍利（遺骨）の容れものとしての「塔」と「墓」との関係性は強く、そしてさらに、遼塔およびそれを継承する金塔の機能が、尊勝陀羅尼の効力を最大限に發揮する容れものとの位置づけから、涅槃により得られる「舍利」は、尊勝陀羅尼そのものとみなされていたとも理解できよう。す



なわち、尊勝陀羅尼を介することにより、釈迦涅槃偈と塔の機能とがより実践的に結び付くものと思われる。

興城磨石溝塔の種字については、東南面の𑖀(om)からはじまり、東北面の𑖀(dīh)もしくは𑖀(bhah)と推測される字で終わる四字の真言の可能性と、それぞれ仏・菩薩の種字の可能性が考えられよう。前者については、真言が聖音omで始まることは通例であり、観音寺白塔の偈文の始まりが東南面「諸法因縁生、我説是因縁」から西南面「因縁尽故滅、我作如是説」へと展開していくことからもうかがえる。

また、後者であれば、東南面の𑖀は虚空蔵菩薩ないし金剛華菩薩の種字である。しかし、先に触れた朝陽出土石函における同菩薩の種字とは異なっており、現状の配置と経軌に定める菩薩の配置が一致しないことも問題であろう。また、東北面の𑖀は金剛燈菩薩の種字の可能性もあるが、現状において判断はしかねる。仮にそうだとすれば、金剛界三十七尊中の外四供養菩薩のうち、金剛華(西南)と金剛燈(西北)となるが、こちらも塔における配置とは異なる。何よりも、他の種字との構成が不明である。遼・金代の梵字は異体字が多いとされるが、実例をさらに収集し、比較することが求められる。

なお、高麗時代の神勒寺の浮屠(13世紀、韓国京畿道驪州市)において、八角形の塔身のうちの四面に梵字を陽刻する。𑖀(持国天)、𑖀(増長天)、𑖀(多聞天)が認められ、四天王を種字で表した例である(なお、もう一字は𑖀であると推測されるが、異字体のようで明確ではない)。

統一新羅および高麗時代の浮屠に四天王像を表す例は多数ある。ここでは、13世紀の作例において種字により尊像を表す例が認められることを、気に留めておきたい。

#### 4. むすびにかえて

以上、興城白塔峪塔、興城磨石溝塔、観音寺白塔の三基の塔を取り上げ、その碑形装飾について確認してきた。いずれも八角形の塔であるが、碑形装

飾を配するのは東南・西南・西北・東北の四面であり、門扉ないし仏龕を設けることが通例の東・西・南・北の四面には位置しない。また、興城白塔峪塔に八大霊塔、涅槃偈、造塔功德經の書写がともに埋納されていたことから、造塔・修塔の功德が涅槃と同様に理解されていた可能性をうかがうことができた。

遼塔およびそれを継承する金塔は、仏頂尊勝陀羅尼の効力を最大限に発揮する場所、すなわち、都の四隅、丘の上などに建立される。ここには、「仏頂尊勝陀羅尼=塔」という理解がなされていたことに基づく。『仏頂尊勝陀羅尼經』において「尊勝陀羅尼=摩尼宝珠」、『無垢浄光大陀羅尼經』において「塔=摩尼宝珠」と説かれ、すなわち、遼塔の機能には、陀羅尼と舍利を奉安する仏塔が同一視され、『仏頂尊勝陀羅尼經』における起塔の勧めを実践し、『無垢浄光大陀羅尼經』に説く起塔の効力<sup>28</sup>により陀羅尼の威力を発揮させることを踏まえていたと推測される。興城磨石溝塔の種字についてもこれに関わる陀羅尼の可能性があるのでないであろうか。今後の課題としたい。

#### 註

- 1 遼塔・金塔の第一層塔身の莊嚴モチーフについては、拙稿「中国・遼寧省におけるいわゆる遼塔の第一層塔身浮彫尊像に関する調査報告」、『金沢美術工芸大学紀要』第55号、2011年3月、49～92頁を参照されたい。
- 2 拙稿「北京天寧寺塔について」、『密教図像』第33号、密教図像学会、2014年12月、1～14頁。なお、天寧寺塔は遼代創建であるが、現状の尊像は金代重修時におけるものである。
- 3 興城白塔についての本格的な報告は、園田一亀氏による次の論考が端緒である。村田治郎氏は本塔について、「玲瓏塔と俗によぶ塔、八角十三簷、前に述べましたやうに四面に仏像・他の四面に石碑形の彫刻のある特殊な例です。遼末から金代中期ごろまでの間の作と推定して」いる。  
・園田一亀「錦州省興城県の白塔について」、『考古学雑誌』30巻12号、1940年12月、832～841頁  
・村田治郎「遼系の仏塔」、『満州の史蹟』、座右宝刊行会、1944年5月、447頁
- 4 前掲註3 園田一亀論考、837頁。
- 5 国家文物局主編『中国文物地図集』遼寧分冊(下)、西安地圖出版社、2009年7月、587・588頁。
- 6 前掲註3 園田論考、827頁。

- 7 現段階において、この石碑の所在と内容は確認しておらず、主に次の論考によった。
  - ・劉謙「興城白塔峪塔」、『遼寧大学学报』（哲学社会科学版）1983年4月号
  - ・陳術石・佟強「从興城白塔峪塔看遼代仏教的密显円通思想」、『北方文物』2012年2月号
  - ・佟強「遼寧興城白塔峪遼塔」、『中国文化遺産』2012年6月号
- 8 拙稿「北京市周辺における遼塔の第一層塔身莊嚴モチーフについて—北京天寧寺塔再考の第一段階として—」、『金沢美術工芸大学紀要』第58号、2014年3月、57～82頁。
- 9 朝陽北塔と『大乘本生心地観経』との関係をはじめて指摘したのは次の村田治郎論考においてであり、また、周旻美論考においてはより両者の関係性が実証的に述べられている。なお、なぜ『大乘本生心地観経』に依拠したのか、次の拙稿において試論を述べている。また、園田一亀氏も、興城白塔峪塔の隅柱の塔名を「唐三藏般若が詔を奉じて訳せりと云ふ「大乘本生心地観経」巻第一、序品第一に出づるものである」と指摘する。
  - ・村田治郎「遼系の仏塔」、前掲註3『満州の史蹟』、430～432頁
  - ・周旻美「遼代八大靈塔圖像의 研究」、『中央아시아研究』第14号、2011年12月、141～172頁
  - ・拙稿「遼代朝陽北塔に関する考察」、『金沢美術工芸大学紀要』第57号、2013年3月、91～110頁
  - ・前掲註3 園田論考、832頁
- 10 本石碑の刻文は、園田一亀『満州金石志原稿』第一冊（満州調査資料第169編）、南満州鉄道株式会社、1936年4月、99～101頁に収録されている。
- 11 前掲註7 陳術石・佟強論考、34頁。
- 12 前掲註5『中国文物地図集』遼寧分冊（下）、588頁。
- 13 中国文物研究所・天津市文物管理中心・天津市薊県文物保管所『中国古代建築 薊県独楽寺』、文物出版社、2007年11月、493頁。
- 14 天津市歴史博物館考古隊「天津薊県独楽寺塔」、『考古学報』1989年第1期、83～119頁。
- 15 なお、雲居寺北塔基壇部の「法舍利塔」に陽刻された「諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、我作如是説」については、法華経の引用との指摘がある。確かに、朝陽北塔の他、塔内天宮に納入された經典の中に法華経が含まれることは多い。遼代に多くの仏塔が建立された背景に、法華経に説く多宝塔の思想があるとされる。これに異を唱える用意はないものの、それ以上に、より実用的な起塔と修塔の効能が求められていたと考えている。長廣敏雄「房山雲居寺塔塔記」、東方文化學院京都研究所編輯『房山雲居寺研究』東方學報第五冊副刊、東方文化學院京都研究所、1935年5月、248頁。
- 16 『大正』19-718中。
- 17 般若訳『大乘本生心地観経』、「若造八塔而供養、現身福寿自延長、増長智慧衆所尊、世出世願皆円満」（『大正』3-296上）。
  - 18 『大正』32-773上～中。
  - 19 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』（『大正』19-351中）。
  - 20 地婆訶羅訳『造塔功德経』（『大正』16-801中）。
  - 21 義浄訳『浴仏功德経』（『大正』16-800上）。
  - 22 前掲註3 園田論考、831頁。
  - 23 例えば真諦訳『涅槃経本有今無偈論』（『大正』24-282下）など。
  - 24 弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼経』、「皆至此処加持彼塔。安仏舍利由加持故。令塔猶如大摩尼宝。是人由此則爲已造九十九億百千那由他諸大宝塔」（『大正』19-720下）。
  - 25 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』、「此仏頂尊勝陀羅尼。猶如日藏摩尼之宝」（『大正』19-351上）。
  - 26 田立坤「朝陽の隋唐紀年墓葬」、遼寧省文物考古研究所・日本奈良文化財研究所編著『朝陽隋唐墓葬発現与研究』科学出版社、2012年6月、115～144頁および向井祐介「朝陽北塔考—仏塔と墓制からみた遼代の地域—」、『遼文化・遼寧省調査報告書2006』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル時代の多元人文学の拠点形成」、2006年3月、190～195頁など。
  - 27 不空訳『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』、「中央安毘盧遮那仏位。右辺安観自在菩薩位。観自在在後。安慈氏菩薩位。毘盧遮那仏位後。安虚空蔵菩薩位。此菩薩左辺。安普賢菩薩位。毘盧遮那仏位左辺。安金剛手菩薩位。金剛手菩薩位下。安文殊師利菩薩位。毘盧遮那仏前。安除蓋障菩薩位。除蓋障菩薩位右辺。安地藏菩薩位」（『大正』19-364下）。
  - 28 弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼経』、「或有短命或多病者。応修故塔或造小泥塔。依法書写陀羅尼呪。呪索作壇。由此福故命将尽者。復更増寿。諸病苦者皆得除愈。永離地獄畜生餓鬼」（『大正』19-718上）。

## 付記

今回の実地調査および本稿は、平成26年度科学研究費による学術研究「遼・金・高麗における仏塔の浮彫莊嚴に関する研究」（基盤研究(C)、研究代表者：金沢美術工芸大学・水野さや）および平成26年度金沢美術工芸大学奨励研究の成果の一部である。

（みずの・さや 芸術学／東洋美術史）  
（2014年10月31日 受理）





図1-1 興城白塔峪塔 錦州市興城県

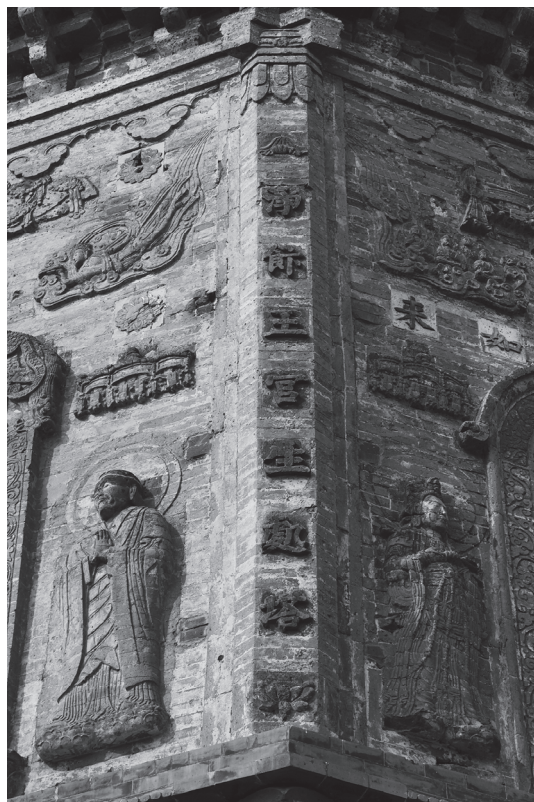


図1-2 同 第一層塔身 西南面・南面の隅柱



図1-3 同 第一層塔身 西南面・南面・東南面





图1-4 同 第一層塔身 西面·西北面·北面



图1-5 同 西面 阿弥陀如来坐像



图1-6 同 西北面 碑形裝飾





図1-7 同 東南面 碑形装飾「寂滅為樂」



図1-8 同 西南面 碑形装飾「諸行無常」





図1-9 同 西北面 碑形装飾「是生滅法」



図1-10 同 東北面 碑形装飾「生滅滅已」



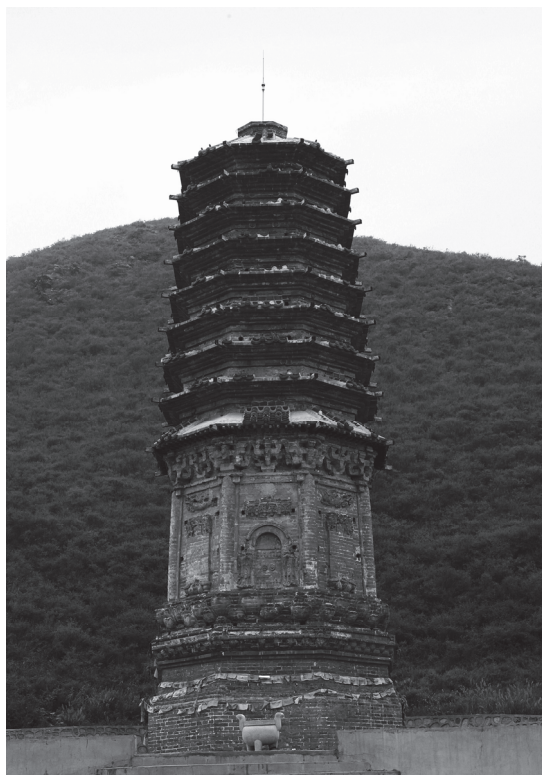


図2-1 興城磨石溝塔 錦州市興城県



図2-2 同 第一層塔身 南面 門扉・二菩薩立像



図2-3 同 第一層塔身 西南面・南面・東南面





図2-4 同 第一層塔身 南面・西南面・西面



図2-5 同 東南面 碑形装飾



図2-6 同 西南面 碑形装飾





図2-7 同 西北面 碑形裝飾



図2-8 同 東北面 碑形裝飾

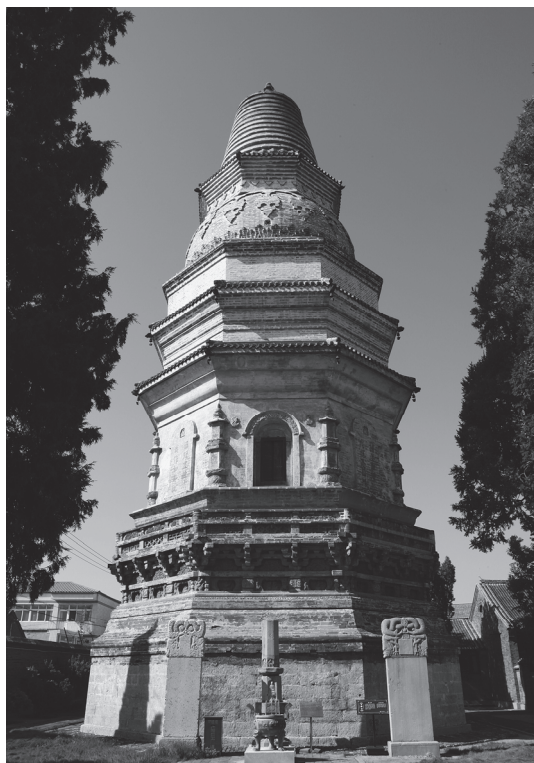


図3-1 観音寺白塔 天津市薊県



図3-2 同 第一層塔身 南面・西南面の隅柱





図3-3 同 第一層塔身 東南面 碑形裝飾  
「諸法因緣生 我說是因緣」



図3-4 同 第一層塔身 西南面 碑形裝飾  
「因緣盡故滅 我作如是說」



図3-5 同 第一層塔身 西北面 碑形裝飾  
「諸法從緣起 如來說是因」



図3-6 同 第一層塔身 東北面 碑形裝飾  
「彼法因緣盡 是大沙門說」





図4-1 潭柘寺広慧通理禪師塔 北京市門頭溝区



図4-2 同 第一層塔身 南面門扉と扁額



図4-3 同 第一層塔身 東北・北・西北面





図5-1 朝陽北塔 遼寧省朝陽市老城区



図5-2 同 第一層塔身 西面  
宝塔と位牌型裝飾



図6-1 中京大塔 内モンゴル自治区赤峰市寧城県



図6-2 同 第一層塔身 東南・南面隅柱



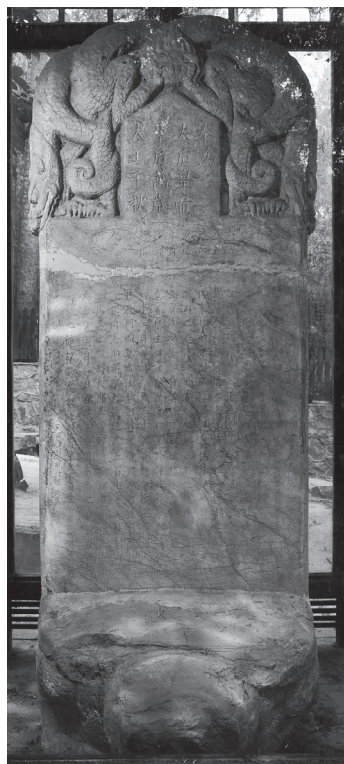


図7-2 同 螭首（正面）

図7-1 大覚寺 遼・戊申年銘陽台山清水院創造藏經記（1068年）北京市海淀区



図8-1 戒台寺 法均大師遺行碑（1081年）北京市門頭溝区



図8-2 同 螭首（部分）





図8-3 同 亀趺



図9-2 同 螭首(正面)



図9-3 同 螭首(背面)



図9-1 安昌峴舍利塔前 舍利塔碑(1152年)  
葫蘆島市南票区



図9-4 同 亀趺



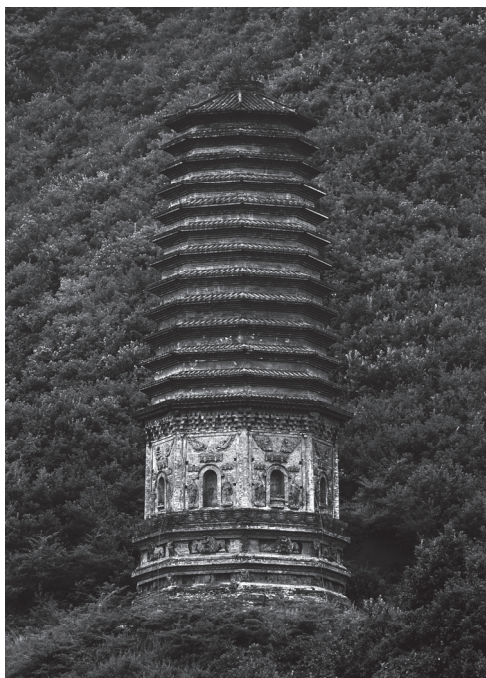


図10-1 海城金塔 錦州市海城県



図10-2 同 基壇部 獅子



図10-3 同 第一層塔身





图11 银山塔林 金代僧塔 北京市昌平区



图12 雲居寺北塔 法舍利塔 北京市房山区



图13 開原崇壽寺塔 遼寧省鉄嶺市開原県



图14-1 小塔子塔 (宝塔寺塔) 瀋陽市康平県





図14-2 同 第一層塔身 東面



図15-1 石函 朝陽博物館



図15-2 同 蓋石中央部分 蓮台と種子